子宮頸がんは予防できる時代に！

医療法人財団足立病院 院長
澤田 守男

毎日、外来で若い患者さんに接していますと、「子宮頸部の細胞診異常、減っていないな・・・」と実感します。その度に、日本での子宮頸がんで苦しむ女性を減らすには、どうすればよいのだろうかと考えてしまいます。

子宮頸がんとは、子宮の入り口に発生する悪性腫瘍で、初期の段階では自覚症状の乏しいために、進行した状態で発見されることがあります。その場合、子を宿すことが出来なくなる（妊孕（ようこう）性を失う）可能性がある、さらに生命も危険にさらされてしまうといった、恐ろしい病気なのです。子宮頸がんに対する治療も時代とともに進歩をみせていますが、予防できるものは予防したいと考えるのが自然の流れではないでしょうか？幸い、子宮頸がんには、がんの原因に対してアクセスする「一次予防」、早期発見・早期診断を目的とした「二次予防」が確立されています。前者がヒトパピローマウイルス（HPV）に対する予防ワクチン（HPV ワクチン）、後者が子宮がん検診（子宮頸部細胞診）にあたります。子宮頸部細胞診は 1940 年代から始まり、HPV ワクチンが出来るまでは唯一の子宮頸がん予防として利用されてきました。しかし、子宮がん検診受診率もまだまだ十分とは言えない状況です。一方、HPV ワクチン、本邦では 2009 年 12 月に発売となり、2013 年 4 月に定期接種に組み込まれましたが、2013 年 6 月に積極的勧奨中止となったまま、7 年以上が経過しました。HPV ワクチンも 2 価・4 価の時代から、いまや 9 価が世界では主流となっています。本邦では、2020 年 7 月 21 日に 9 価の HPV ワクチンが認可され、いよいよ子宮頸がん予防の新局面と期待しているところです。

マザーキラーと呼ばれる子宮頸がんという病気を皆さまに知っていただき、「子宮がん検診・HPV ワクチン接種、考えてみようかな？」という気持ちに少しでもなっていただければ、講演する者にとっては幸いです。この時代に生きた産婦人科医として、守れる命は守りたい、そんな想いで一杯です！